

第 1880 回 定例研究会報告要旨（2月26日）

内蒙古自治区の草原砂漠化の要因と その抑制策

（科学技術振興事業団）双 喜

中国内蒙古自治区（以降「内蒙古」とする）では草原の砂漠化が深刻化し、牧民の生業だけでなく近隣地域の農業生産にも大きな悪影響を与えており、砂漠化に関する適切な抑制策の構築が求められている。草原の砂漠化については、近年数多くの研究がなされているものの、人口増加、草地の開墾、過放牧、薪木伐採、気候変動（強風、干ばつ）といった一般的な要因の指摘に止まるものが多く、これら要因はどのような社会的・経済的背景の下で砂漠化を引き起こしているのかという点については十分に解明が進んでいるとはいえない。本報告では、内蒙古の草原牧畜地域を対象に、砂漠化の最大の要因である過放牧に至った歴史的経緯と今日の草原牧畜業が過放牧に陥るメカニズムを社会経済的側面から明らかにし、草原砂漠化の抑制策を検討した。

具体的には、草原牧畜地域で過放牧をもたらしているのは家畜飼養頭数の急増である。特に羊飼養頭数の増加は、改革開放以後の20年間において増加した家畜頭数の約99%を占めており、平均年間67万頭のペースで増加してきたことから近年の過放牧は羊飼養頭数の急増によるものと言える。

この羊飼養頭数急増の背景には主に次のような社会的経済的要因があった。牧畜制度の変革によって牧民の増頭意欲が高まったこと。即ち、家畜の所有権がごく一部の貴族などから牧民共同管理へと移り、さらに家畜の請負制の導入などの制度変革が起こり、家畜が私有化された。それに伴い牧民の生産意欲が高まり、羊の飼養頭数が増加した。商品経済の浸透により牧民の消費支出が増大した

こと。牧民の生産と生活条件の変化に伴いより多くの貨幣が必要となり、その貨幣を獲得するために羊の飼養頭数を増加させた。羊肉需要が増大したこと。近年の経済成長と食生活の多様化に伴い都市部で羊肉の消費が一般化し、羊肉の需要が増大した。羊肉の需要増大は羊飼養頭数の増加に拍車をかけた。出荷ルート不安定性により出荷の抑制が起こったこと。古来、牧民は家畜を財産として生体で貯め込む習慣があり、今日における出荷ルートの未整備、不安定性はこの傾向を助長させ、羊飼養頭数の増加を加速させている。

これら諸要因によって家畜の飼養規模拡大と多頭化が進み、草原牧畜地域では草資源の限界を超えた過放牧が行われ、草原が退化・砂漠化することになった。

そこで、草原の維持は草原牧畜業の持続的発展の前提条件であり、草原の退化・砂漠化を防止するためには過放牧を解消しなければならない。そのためには、仲買人を育成し組織化（登録制度の導入等を含めて）することで、仲買人と牧民の間の信頼関係を構築しながら牧民に安定した出荷ルートと価格情報を提供すること。牧民の経営意識転換のために経営技術指導を行い、多頭低出荷率経営から少頭高出荷率経営への転換および良質の羊肉と毛を生産する方向を支援すること。草原羊肉のブランド羊肉としての地位を確立させ、国内外の市場開拓に最大の努力を払うこと。牧民の草地に対する継続的長期利用を考えた保護意識の育成に力を入れ、草地の放牧可能頭数を超えないような制度を作ること。牧畜経営から没落する牧畜農家や小規模経営者を他産業へ転業させ、有能な牧畜経営者の規模拡大・集約化を促すこと。これらの対策を行うことで家畜の出荷率が高まり、草原の放牧頭数が減少すれば、過放牧は解消するであろう。そうなれば草原の退化・砂漠化は抑制され、草原牧畜業の持続的発展は可能となる。